対話的授業論――理論的考察のためのメモ②

宮崎清孝

「事実と創造」#380 2013 1月号

五、認識論的対話と存在論的対話

対話は二つの側面を持つ

対話には、認識論的な面と存在論的な面があり、この二面性の自覚と関係づけが授業を作っていく場合に重要だ。

認識論的と存在論的の二つの区別は、もともとはユージン・マツゾフがおこなった（注）。しかしマツゾフは、認識論的対話（的授業）と存在論的対話（的授業）をまったく別の種類の対話（的授業）だと考えている。それに対して私は、この二つが一つの対話的な（あるいは独話的な）関係が常に持っている二つの側面だと考えたい。このマツゾフとの意見の違いについては、今はこれ以上触れない。

まず言葉の説明をしておこう。対話的関係の認識論的側面とは、三項関係の中で人が世界をどのように理解しているのかということに関わる側面だ。なおすぐに付け加えておくと、この側面は何も関係が対話的なものにしか存在しないわけではない。対話的なものであろうが独話的なものであろうが、すべての三項関係に、この側面は存在している。それは次で扱う存在論的な側面も同じである。

さて、認識論的側面での対話は、世界の理解の仕方についての対話参加者の対話である。ここで第三項は、認識の対象としての世界だ。他方存在論的側面とは、三項関係の中で人が世界に対してどのように働きかけているのか、行為しているのか、ということに関わる側面だ。この側面での対話は、世界に対する行為に関する対話であり、必ずしも言葉によってなされるとは限らず、それ自体行為による関わり合いとしてもおこなわれる。ここで第3項は、行為されるものとしての世界だ。

ふつう存在論という哲学用語は、世界の構造、あり方について考える哲学的思考を意味している。だがここでは、それをもっと狭く、世界の中での人の行為の仕方、あり方を示す言葉として考えている。というのも、動物である人間とは、世界の中で動き、世界に働きかける存在だからだ。

世界の中で動き、世界に働きかける、というと抽象的な感じがするかもしれない。別の言葉でいえば、人が生きていくということだ。対話的（あるいは独話的）関係の存在論的な側面とは、人が生きる中で他の人の生き方と交じり合い、行為の面で影響し合う、という面である。

繰り返すことになるが、存在論的と認識論的な側面は、関係の二つの側面であって、常に二つ共にあり、切り離すことができない。これは人間（というだけでなく、動物全体がそうなのだが）にとって、行為すること（生きること）と認識すること（理解すること）が固く結びついているからだ。ギブソンという心理学者のいったことをやや言い替えてみると、

「人は行為するために認識し、認識するために行為する」

ということなのだ。

それにしても、なぜこの二つを分けて考えることが必要なのだろう。これまで授業の研究をするとき、少なくとも私自身の場合、無意識のうちなのだが、焦点化していたのは認識論的な側面だった。つまり、知識をどう理解するか、どう探求するか、ということに焦点化していた。だが教育とは、最終的には人がどう生きるか、人がどう他者と関わり合うのか、ということに関する営みではないか。とすると、存在論的な側面にもっと光を当てるべきではないか。授業の中でも、存在論的な面が主要な役割を持つ場合がいろいろあるではないか。

例えば道徳の授業がそれだ。また生徒指導の中にも、人がどう生きるべきなのか、という問題は重要なものとして存在しているだろう。別の面からいえば、斎藤教授学的発想できわめて大事な教師の学び論は、さらにその先に教師の子どもの前でのあり方論、生き方論へと展開するだろうが、これもまた存在論的な問題だろう。

ただし誤解のないようにいっておくと、存在論的な面と認識論的な面は、常に結びついて存在している。だから、道徳の授業にも認識論的な面は存在している。これについては後でちょっと見るつもりだ。逆に言うと、一見もっぱら認識論的な面（つまり知の理解、探求）が問題となるような、いわゆる教科の授業にも、存在論的な面は存在しているのだ。たとえば理科の授業で、知的な探求をおこなっている子どもは、探求者、科学者として

存在しているのだ。

牛山栄世という実践者

この二つの側面について斎藤喜博が明示的に発言しているかどうか、まだ検討していない。ここでは斎藤教授学から離れ、この二つについて明示的に語っている実践者を紹介しよう。牛山栄世（はるひで）というもう亡くなられたが、信州大学附属松本中学校副校長、信濃教育会研究所副所長などを務められた長野の実践者である（著書に、牛山二〇〇一がある）。私が今関わっている信州大学附属長野小学校の副校長畔上一康先生の師でもあり、私は彼を通してその考え方を学んでいる。以下に彼の書いた詩を示すが、そこに明らかなように彼の考え方は今私たちが展開しようとしている「問うこと」を中心とする対話的な授業論ときわめて近いところにある。

学ぶということ　　牛山栄世

学ぶということ。それは
誰のものでもない「私」の問いを生きること
その問いによって、更なる問いに生きること
そのようにして、ものごとの奥行きにふれること

学ぶということ。それは、
誰のものでもない「私」の思いをかけること
そして、思いがけないことに出会うこと
そのようにして思い知らされること

学ぶということ。それは、
誰のものでもない「私」が
誰のものでもない「あなた」に出会うこと
それは、見る私が見られること
それは、働きかける私が働きかけられること
そのようにして、私が変わり、あなたが変わること

学ぶということ。それは、
私の中にいるあなたと、あなたの中にいる私を感じること
その喜びに浸ること
そのようにして、私もあなたも元気になること

この詩の第一連が、まさに最初に述べた「探求としての問い続けること」という考え方と響き合うことは明らかだろう。だがここでは特に第三連に注目したい。ここでいう、

「見る私が見られること」

が、関係の認識論的な側面であり、

「働きかける私が働きかけられること」

が、関係の存在論的な側面だ。そこで

「私が変わり、あなたが変わる」

ということが、二つの側面のいずれにおいても、対話的な関係が存在しているということだ。

なお余計な一言を付け加えておけば、この詩でも三項関係という発想はない。それぞれの場合に第三項は何かということを念頭に置いて読めば、この詩の理解がより進むはずだ。

自分の人の生き方と対話的に関わるとは

もう一度対話的関係の認識論的側面と存在論的側面という問題に戻り、実際の事例を用いて、この二つの側面を意識化することの意義について考えておこう。

千葉茨城教授学の今年の夏の合宿で、『カーテンの向こう』を教材とする道徳の授業が取り上げられ、模擬授業がおこなわれた。『カーテンの向こう』はご存知の方も多いだろうが、ある病院の一室の話しである。そこには窓が一つしかなく、しかもカーテンが掛かっていて、ヤコブという一番古い患者だけがどうにかその外を見ることができ、他の患者たちはヤコブの報告を楽しみにしている。だが他の患者が外を見せてくれと頼んでもヤコブは譲らない。主人公の「私」は、そんなヤコブが憎らしくなり、死ねばいいと思うようになる。やがてヤコブは死に、それによってもっとも古い患者となった「私」は、窓の外を見ることができたが、そこに見たものは……、というのが粗筋である。

模擬授業で先生役をされた先生は、「私」が外を見たが、というところで物語を一度切り、ヤコブがなぜ他の患者に譲ろうとしないのか、ということを中心に私たちにいろいろ考えさせた。その中で、私たちはヤコブの気持ちや、「私」の気持ち、カーテンの向こう側の情景について、いろいろ想像した。

模擬授業が終わった後で、ある先生が模擬授業に対する感想として「推理ゲームみたいだ」という、おそらく

は否定的なニュアンスを込めた発言をされた。ヤコブや文中の「私」の気持ちやら、「カーテンの向こう」の情景やら、それを「私」がどう見ているのやらについて考えることを、そしてそれが読者としての私たちならばどう感じるのかとか、自分なら窓のところに行ったときにどうするだろうか（あるいはどうすべきだろうか）ということと無関係に考えることを，そのように感じられたのだろう。もしそうなら、この感想はまったくその通りだろう。

ここでの言葉を使えば、そのとき私たちは認識論的な側面の活動を主としておこなった。道徳とは最終的には「自分はどうすべきか」という存在論的な問いを問うものなのに，ここではそうなってない。そこに距離感がある。そのことを、この先生はこういういい方で感じ取られたのだろう。

だが、認識論的側面と存在論的側面は、不可分で常に両方が存在しているということから考えていくと、この距離感は，子どもにむりやり「君ならどうする」という存在論的問いを問うことによってではなく、ヤコブやら文中の「私」についての推測という認識論的側面の活動を多様にやっていくことで，自ずと埋まっていくのだと予想される。「ヤコブ」や文中の「私」についていろいろ想像していく中で，自ずと、「自分ならばこうするのに」とか、「そうか自分では考えもしなかったが、そういうやり方もあるのか」と、自分との関わりが生まれていくだろう。むろん現実の授業ではそう一筋縄ではいかないだろうが，可能性としてはこの教材という「物語」の理解を多様に推し進める認識論的側面の活動を盛んにおこなうことで、それが「自分ならどうするのか」という存在論的な問いへとつながっていく可能性があるのだろう。

もう一つ例を出そう。塚本先生による安西冬衛の詩『春』の授業のための教材解釈だ。『春』の準備の中で、塚本先生は「春」とは直接関係ないような，先生の周辺の人たちの生き方に関わるエピソードやその人たちからのメールをいっぱい使われていた。今紙幅の関係で，内容は省略せざるを得ないが，一つだけ例を挙げておくと、何年も苦労された後に退職を決意された先生のエピソードである（その内容は塚本先生の「小説的な授業への対話―ひとつの解」一七六頁以降にある）。これが『春』の読みにとってどういう意味を持つのか。

初め私は、かなり面食らった。いわゆる「道徳的な読み」、つまり国語の理解でよくないと（正しくも）されている、主人公の行動などを道徳の徳目で判断して結論してしまう読みを連想したのだ。だが、考えていくうちに、それとはちょっと、だが決定的に、違うことが分かってきた。詩や小説を読むときに，自分の、また回りの人たちの生き方、人生と、何らかの意味で関わり合わせて読むことは、ごく当たり前の読み方ではないか。一方では、自分の人生の方から，作品の内容を照らし出し、深く理解することがあり、また逆の方向で、作品に描かれた事柄から自分の生き方に洞察を得る、という読み方だ。『春』の場合でいうと、これは何らかの意味での決断を描いていると解釈できる。だからそれは、苦悩の上の退職という決断と重なり合い、その行為の意味を照らし出してくれるのだ。

ここでの言葉を使うと，作品の内容世界についてイメージを膨らませるとは、認識論的な側面が主として関わる活動だ。それが、自ずと自分や人の生き方という、存在論的な側面の問いと関わってくるのだ。この両者は，実は一つの活動の両側面として、密接に関わっているし、それだけでなく、お互いの活動を相互に促進しうるのだ。塚本先生がやっていることはそれなのだ。

存在論的な問いと関わらせることがいけないわけではないのだ。ではそれが道徳的な読みに堕してしまうのはどういう場合か。それは，存在論的な「問い」だったはずのものが、道徳の徳目的な数え上げ、確認、教え込みになってしまう場合だ。「正解」としての徳目を教え込む、ということになってしまう場合だ。

実はこのことは、先に挙げた合宿での『カーテンの向こう』を教材とした模擬授業後の議論で、我々にとって明確になったことだった。子どもの実感（子どもの、自分の存在のあり方についての）と、「カーテンの向こう」の登場人物たちの取り得るいろいろな感じ方を関わらせていく中で，さらに多様に読みの理解活動（認識論的な側面）を盛んにしていく。そのことによって、子どもが先にも書いたように「自分ならこうするのになぜヤコブは？」とか「自分では考えもしなかった感じ方があるようだが，本当にそれがいいのだろうか？」といったように、自分のあり方と実感的に関わらせながら問いを生み出していき、それによって自分のあり方を確認したり、変えたりする（存在論的な側面）ということが大事だ。最終的に，それがどんなものであれ「期待される徳目」（つまり、「正解」）にたどりつくことは重要ではない。そのような問いを経験することなしに子どもたちがそこにたどりついたとしても、それは単に言葉を覚えるということになってしまう。

結局のところ、道徳であろうが国語であろうが、子どもたちが自分の存在のあり方に根付いた実感に基づく問

いを教材の理解にあたって出していく経験が重要なのだ。それがなければ、授業は対話ではなくなり、正解を記憶するための、独話的授業になってしまうのだ。

文献

荒木田恵、塚本幸男　二〇一一　小説的な授業への対話―ひとつの夢．　私家版．
バフチン　望月哲男、鈴木淳一訳　一九九五　ドストエフスキーの詩学．　筑摩書房．
ガダマー　轡田収、巻田悦郎（訳）　二〇〇八　真理と方法．　法政大学出版会．
小出哲也、塚本幸男、逸見譲、千木良早苗　&　綿引弘文　二〇一一　小説的な対話―ひとつの頂．　私家版．
宮崎清孝（編）二〇〇五　総合学習は思考力を育てる．　一莖書房．
宮崎清孝二〇〇九　子どもの学び教師の学び―斎藤喜博とヴィゴツキー派教育学．　一莖書房．
宮崎清孝、塚本幸男、綿引弘文、大沼徹　二〇一一　小説的な対話―ひとつの問い．　私家版．
Morson, C. S., & Emerson, C. 1990 Mikhail Bakhtin. Stanford University Press.
斎藤喜博　一九七〇　斎藤喜博全集第一期第六巻・教育学のすすめ．国土社．
鈴木亮子、塚本幸男　二〇一一　小説的な授業への対話―ひとつの光．　私家版．
塚本幸男、宮崎清孝、松本陽一、吉川千帆　二〇一一　小説的な対話―ひとつの解．　私家版．
牛山栄世　二〇〇一　学びのゆくえ―授業を拓く試みから．　岩波書店．
吉川千帆、塚本幸男、宮崎清孝　二〇一一a　授業『仲なおり』をめぐる対話（上）　事実と創造、三六二巻
吉川千帆、塚本幸男、宮崎清孝　二〇一一b　授業『仲なおり』をめぐる対話（上）　事実と創造、三六三巻

注　現在マツゾフとこの問題についての対話的な論文を準備中である。

なお、本稿は二〇一二年七月二九日におこなわれた千葉茨城教授学の会夏の合宿での発表に手を加えたものである。

（早稲田大学）